

仙台藩茶道石州流清水派の祖三世 清水道竿の業績（その二） 道竿の作庭と伝わる庭園



仙台藩茶道石州流清水派宗家十一世

大 泉 道 鑑

筆者の母仙台藩茶道石州流清水派（当流）宗家十世大泉道鑑（明治四十二年～平成二十二年―一九〇九～二〇一〇）は、生前「仙台藩茶道石州流清水派の祖三世清水道竿の業績（その一）道竿の経歴と人脈」と題を付けた解説文を『関』（第二十号）に投稿していた。今回、筆者はこの後を受け「その二」として、仙台藩茶道茶道頭三世清水道竿（さおどうかん、寛文二年～元文二年―一六六二～一七三七）が当流の茶道全般にわたり芸術性を高めた功績の一端を、垣間見ることが出来る日本庭園の作庭について述べる。

本論に入る前に、三世道竿の人物像と共に日本庭園文

化の歴史について簡潔に説明しておきたい。石州流の流祖片桐石見守貞昌（慶長十年～延宝元年―一六〇五～一六七三）の高弟である茶道頭二世清水動閑（慶長十九年～元禄四年―一六一四～一六九二）の没後、元禄五年（一六九二）に、全国に数奇大名として名を馳せた仙台藩四代藩主伊達綱村公（万治二年～享保四年―一六五九～一七一九、写真1）から、一門の茶人中で実力が群を抜いた馬場道斎（後の三世道竿）がその後継者に指名された。それ以降、三世道竿は綱村公及び五代藩主伊達吉村公（延宝八年～宝暦元年―一六八〇～一七五二、写真2）の二代にわたり、藩主の茶道指南役という大役を果たした。また、当流の芸術性をより一層高め、これを藩内に確立させると共に、全国各藩にもこの流儀を広めたため、一般に当流の祖と言われている。しかし、三世道竿自らは仙台藩茶道頭清水家を継ぐ者として、三世と称していた。この詳細なきさつについては、十世道鑑の著書『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』及び『関』（第二十号）の解説文に記述されているので割愛する。次に、日本の庭園文化の古き歴史の紐を解いてみよう。一般に、日本庭園は池泉庭園、枯山水及び露地（茶庭）の三種に大別される。先ず、

池泉庭園の歴史が最も古く、遙か飛鳥時代〜奈良時代までも遡る。言うまでもなく、これには海を表現した水（池）が必ず最も重要な構成要素となっている。次に、鎌倉時代以降になると、禅宗の普及に伴って自然の景観を表現するために、庭園の石組みが考案され、これを枯山水と称するようになった。更に時代が下り、桃山時代を迎えると、千利休（大永二年〜天正十九年―一五二二〜一五九一）により大成された茶道の理念が生かされた茶庭が、盛んに造られるようになった。一方、先に述べた池泉庭園は、観賞の方法によって更に池泉舟遊式、池泉観賞式及び池泉回遊式



写真1 仙台藩四代藩主 伊達綱村公像
(仙台市博物館蔵)

の三つに大きく分けられる。庭園の中を散策しながら鑑賞出来る池泉回遊式庭園は、茶庭の出現によってより頻繁に作庭されるようになった。更に時が流れて江戸時代になると、大名庭園が全国各地の大名により造園され、その代表的なものとして小石川後楽園、金沢兼六園及び岡山後楽園等がよく知られている。これらは、大規模な池泉回遊式庭園と言え、後に詳しく述べる旧有備館の庭園（大崎市）もこれに分類されよう。

さて、宮城県内には当流の歴代の茶道頭・宗匠（図）の深く関わったと伝えられてきた名勝庭園が現存している。



写真2 仙台藩五代藩主 伊達吉村公像
(仙台市博物館蔵)

その中で昭和八年（一九三三）に国の史跡及び名勝に指定された旧有備館の庭園を初め、旧阿部家庭園（大崎市）、名取家庭園（大崎市）及び旧亘理氏庭園（登米市）の四つの庭園が三世道竿の作と言われている（表を参照）。

最初に、これらの庭園の中で最も代表的で、しかも観光スポットとしても知れ渡っている旧有備館とその庭園について説明する（写真3）。仙台藩祖伊達政宗公（永禄十年〜寛永十三年―一五六七〜一六三六）は、天正十九年（一五九一）の豊臣秀吉公（天文六年〜慶長三年―一五三七〜一五九八）による奥州仕置により米沢城から岩手沢城（後の岩出山城）へ移り、ここ岩出山に十年余治府

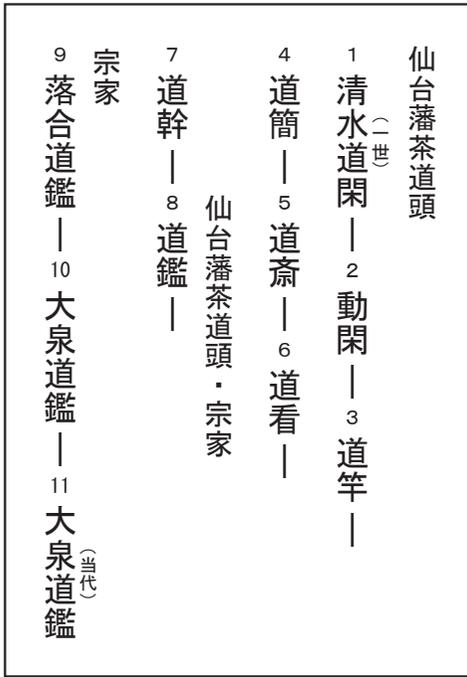


図 仙台藩茶道系図（茶道頭及び宗家）

表 仙台藩茶道石州流清水派関連の庭園一覧

名称	所在地	作庭年代	清水派との関連	文化財指定		面積(m ²)
				名勝(市)	平成9年7月29日	
煙雲館庭園	気仙沼市	寛文年間 (1661~1673)	二世動閑	名勝(市)	平成9年7月29日	1,650
旧有備館庭園	大崎市	正徳5年 (1715)	三世道竿	史跡・ 名勝(国)	昭和8年2月28日	23,855.92
旧阿部家庭園		—		—	80	
名取家庭園		(不明)		—	—	100
旧亘理氏庭園		登米市		—	—	450
渡辺家庭園	岩沼市	文久2年 (1862)	七世道幹あるいは 八世道鑑	名勝(市)	昭和44年5月29日	396.88

注) 『宮城県の名勝に関する特定の調査研究事業報告書』の3頁の表を一部改変



写真3 旧有備館（主屋）とその庭園

よれば、そも
 とも旧有備館
 の御改所おのりためどころ（主
 屋）は、延宝五
 年（一六七七）
 に二代伊達宗
 敏（寛永二年
 一六二五）
 一六七八）の隠
 居所として岩
 出山城・二の丸
 に建てられた
 ことに端を発

を置いた。その後、政宗公は慶長六年（一六〇一）に居城を仙台へ移したため、慶長八年（一六〇三）に四男伊達宗泰（慶長七年）寛永十五年（一六三九）が岩出山城の城主に任ぜられ、岩出山伊達家（一万五千石）の祖がここに誕生した。『岩出山町史 通史編・上巻』及び『宮城県の名勝に関する特定の調査研究事業報告書』に



写真4 旧有備館の上の間

一六八二（一七三一）が、これを整備している。この旧有備館が、我が国で現存している最古の学校建築（学問所）として、歴史にその名が深く刻まれることになった。この建物は、平屋建で面積は

している。その後、下屋敷・隠居所として使用されたが、三代伊達宗親（敏親）（慶安四年）享保六年（一六五二）一七二二）が元禄四年（一六九二）「春学館」と名付けて学問所として開設した。翌五年（一六九二）には、現在地（大崎市岩出山字上川原町六）に移築されて「有備館」と命名され、後に四代伊達村泰（天和二年）享保十六年

二〇八平方メートルで、主屋の屋根は四方造茅葺、二方折廻縁を有する寄棟造・素木造の建築である。その裏側に玄関が付いており、座敷（写真4及び5）からは庭園が一望出来、若かりし頃の筆者がそこから見た風流な情景は、今でも私の脳裏にしつかりと焼付いている。なお、平成二十三年（二〇一一）三月十一日の東日本大震災の際



写真5 旧有備館の上の間の床の間と違い棚

に惜しくもこの主屋は被災してしまったが、修復工事がようやく昨春完了した。一方、この旧有備館の庭園も村泰によつて正徳五年（一七一五）に整備されたが、その作庭には三世道竿



写真6 旧有備館の茶島（右奥が茶亭、左奥が主屋）

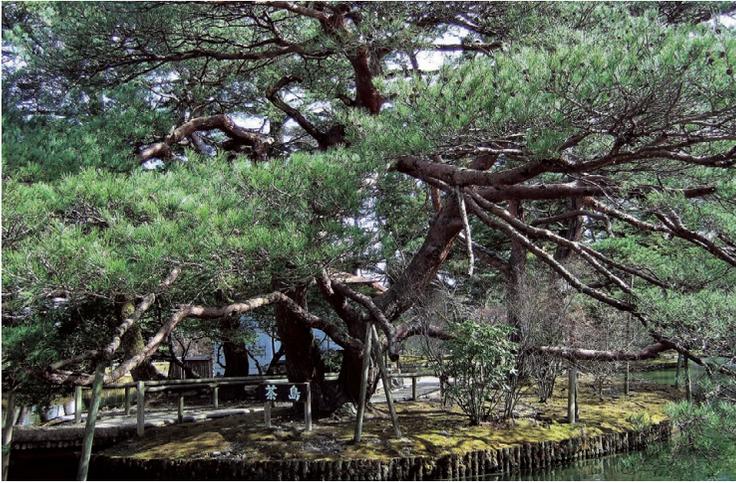


写真7 旧有備館庭園の茶島と見事な老木（松）

園の池の中には、茶室が建つ御中島（茶島）（写真6及び7）、鶴ヶ島（鶴島）、亀子中島（亀島）及び兜島の四つの島が配置された趣の深い池泉回遊式庭園である。何と云っても、この庭

の才能が遺憾なく發揮されたと、語り継がれてきた。なお、仙台藩切つてのこの名庭園には、三世道竿の主君吉村公が二度も訪れている。

旧有備館庭園は、岩出山城の在る城山（標高六〇メートル）の断崖を借景にする工夫が凝らされ、これを含めた総面積は二三、九〇〇平方メートルにも達する。また、庭



写真8 旧有備館庭園を背景にした著者と道門会のメンバー（右から3人目が筆者、右から2人目が大崎市文化財課中村一彦氏）

地」とも言うべき掛替^かえのない文化財であることを再認識するまたとない良い機会となった。

なお、東北地方では本格的な大名庭園としては、この旧有備館庭園と会津若松市の松平家の御

園の魅力は見事な園池とよく調和の取れた五〇〇本近くに及ぶ美しい樹木、また四季折折絶え間なく咲誇る花を觀賞しながら散策出来る点である。筆者は、旧有備館修復工事後では、初めて今年三月下旬にここを訪れたが（写真8）、この庭園の美しさに心を奪われ、しばし言葉を失った。

流祖三世道竿が作庭したこの庭園は、私共にとって正に「聖

菓園の二つしか知られていないため、いずれも貴重な文化遺産である。

古来、この旧有備館の庭園は、仙台藩随一との誉れの高い茶人によって作庭されたと伝えられている。ここで、この茶人について文献に基づいて時代考証してみよう。まず、前にも述べた「春字館」が現在地に移されて「有備館」と名付けられた元禄五年（一六九二）には、三世道竿は三十歳で、綱村公により茶道頭に任ぜられ、これ以降、仙台藩茶道全般を取り仕切ることになった（『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』）。次に、この庭園が作庭された正徳五年（一七一五）の時は、三世道竿が五十三歳で、藩主の茶道指南役の重責を果しながら、大活躍していた時期と符合している（『岩出山町史通史編・上巻』、『宮城県の名勝に関する特定の調査研究事業報告書』）。更に、『宮城の郷土史話』にも、「岩出山の東南に接する東大崎の小館下に「道閑清水」と言われている所が存在していること、旧有備館の付近に在る武家屋敷に滞在してこの庭を作庭したと伝えられていること、また茶島の茶室に三世道竿の作とされる花筒が懸けて在ったこと等が三世道竿による作庭との証あかしとなろう。」と記述されている。以上述べた歴史的

事象を総合して考え併せると、この庭園は三世道竿によって作庭されたと考えられよう。

ところで、三世道竿は旧有備館の庭園の作庭に先立って、岩出山城下の旧阿部家、名取家、栗原家、須江家及び岩出山要害屋敷内の五箇所の庭園を試作したと伝えられている。しかし、この中で現存しているのは旧阿部家と名取家の二つの庭園のみである。前者は、岩出山を背景に取り込み、中島と出島を巧みに配した園池とその周辺の風情ある古木がよく調和している。一方、後者は、江戸中期以降に定型化した庭園の特徴を有するとされ、主屋の南側に造られた庭園の中央に池が在る。ここへ水を引く水路の周辺は、まるで大自然の溪谷のような雰囲気を見事に醸し出している。旧有備館の大名庭園に加え、岩出山伊達家の家臣の武家屋敷に造られた風雅なこの両庭園も、この城下で花が開いた「伊達文化」を色濃く伝える文化遺産として極めて貴重な存在である。この他に、三世道竿の作とされる庭園には、宝暦七年（一七五七）に津田家に代り佐沼城（登米市）の城主となった亙理氏の庭園が知られている。その場所は佐沼城の西側に隣接した高台に在り、堀池の上段に配置されるように造成されていた。これらの立地条件を勘

案すると、茶室が隣接している主屋からの藩政時代の眺望はさぞ素晴らしく、堀池更にもその奥の城下の風景を眼下に見下すことが出来るのが、大きな特徴であったと考えられる。この庭園は、このような水堀を背景にした眺望の特徴から、江戸期に開花し、今もこの地に息付いている「伊達文化」の遺産と言えよう。しかし、残念なことに掛替^{かぎ}のないこの堀池は、現在埋め立てられてしまっており、往時の全貌を偲ぶことが出来ない。

ここで、三世道竿以外の当流の歴代の宗匠の作庭と伝えられている庭園について、簡潔に触れておきたい（表を参照）。煙雲館は、千石を領した伊達家御一家筆頭鮎貝氏歴代の居館で、国文学者で歌人の落合直文（元の名が鮎貝盛光、文久元年〜明治三十六年―一八六一〜一九〇三）の生家としても名高い。この煙雲館庭園（気仙沼市松崎片浜一九七）は、二世動閑により寛文年間（一六六一〜一六七三）に造園されたと言われており、旧有備館庭園と並び仙台藩の庭園の双璧と称されてきた。この庭園も、丘陵裾部の地形を最大限利用した情趣ある回遊式庭園で、また風光明媚な気仙沼湾、岩井崎や大島等の雄大な景観を借景としている点が大きな特徴と言える。庭池には、切岸状

に堀削して中島を造り、地山の湧泉^{ゆうせん}を池に引く工夫^{ぼてこ}が施されている。なお、この庭園も今日まで脈々と生き続けてきた貴重な「伊達文化」の遺産として平成九年（一九九七）に気仙沼市の名勝に指定された。一方、当流七世清水道幹（文化十二年〜文久三年―一八一五〜一八六三）あるいは八世清水道鑑（天保十一年〜明治四十五年―一八四〇〜一九一三）の作庭と伝えられている渡邊家庭園が、岩沼市南端（岩沼市南長谷字西川前二〇）に残されている。渡邊家は、阿武隈川の左岸に接している交通の要所に在り、藩政時代には米等の荷物の中継所として、また藩主や代官の宿所も兼ねていた。文久二年（一八六二）に十二代渡邊吉兵衛が藩に願ひ出て、近江八景を模してこの庭園の作庭を依頼したと言う。藩政時代には、阿武隈川及び七畝山の壮大な眺望がこの庭園の借景として活用されていたことは、想像するに難^{かた}くない。昭和二十三年の阿武隈川改修工事により、建物が移築されまた、庭園も移設されてしまったことは、誠に惜しまれる。なお、昭和四十四年（一九六九）にこの庭園は、岩沼町（現岩沼市）の名勝に指定されたが、その作庭者を含めた詳細な歴史学的研究が、更に進展することを期待している。

これまで、当流の祖三世道竿が残した芸術性に優れた庭園を概観し、また二世動閑及び七世道幹あるいは八世道鑑が造園したとされる庭園にも多少触れてきた。当流縁の庭園の詳細及びこれらに関する調査研究の最近の動向については、昨年の四月に報告された『宮城県の名勝に関する特定の調査研究事業報告書』を参照して戴きたい。これらの庭園は、当流が藩政時代から芸術的に高度に発展した「伊達文化」を象徴する存在で、その中で常に中心的な役割を果たしてきた証^{あかし}とも言える貴重な文化財である。今年には、藩祖政宗公生誕四五〇年の記念すべき年に当り、最近宮城県では、「伊達文化」に深い関心と大きな期待が高まり、これを見直し、正しく検証していこうという気運が盛り上がっている。このような時期に、当流の歴代の宗匠が作庭に深く関わった庭園について、「宮城県の名勝に関する特定の調査研究事業」が系統的に実施され、これらの歴史学的解明研究が進められた。この注目すべき研究成果は、先に述べた調査研究事業報告書にまとめられた。この報告書は、本県の文化財保護行政に大きな一石を投じることとなり、このような研究が更に進展するための確固たる礎^{いしずえ}が築かれたと言え、誠に心強い限りである。なお、この調査研

究には筆者も微力ながら、資料・情報提供等で協力を行った。

ところで、石州公の高弟の二世動閑の著した『動閑茶湯書』十八冊の中に「露地之書」があり、これは当流の茶庭の作庭に関するいわゆる「解説書」に相当するものである(写真9)。この伝書十八冊については、十世道鑑が、『清水動閑註解石州流三百箇條』三巻と共に解説研究を精力的に進め、前者は十八冊中七冊、後者は三巻全てをまとめて、『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』と銘を打った本を著した。しかし、『動閑茶湯書』は、当流では藩政時代からその時まで、「門外不出」の伝書として扱われてきたこともあり、「露地之書」はまだ公表されていない。最近、筆者はここに記されている内容が、これらの庭園の全貌を解明する研究に少なからず貢献するのではないかと考えるに至った。そこで、十世道鑑が行っていた「露地之書」の解説研究を補足・完成させて、近い将来茶道の学術誌に投稿する計画である。

三世道竿が創意工夫を凝^こらして完成させた当流のこの上もなく優美な大名茶の手前を継承していくことは勿論のこと、歴代の宗匠により作庭された庭園等の重要な文化財の



写真9 『清水動閑註解石州流三百箇條』三巻及び『動閑茶湯書』十八冊
(十一世大泉道鑑所蔵)

歴史的解明研究にも、微力ながら力を注いで行きたい。また、当流の宗家を継承した者として、今に息づくこれらの「伊達文化」を全身全霊で守り抜き、後世に正しく伝えていく使命を果す所存である。皆様には、今後ともご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げます次第である。

謝 辞

伊達綱村公及び伊達吉村公の像を掲載することを許可下さった仙台市博物館に深謝する。また、旧有備館及びその庭園の写真の掲載を許可下さいました大崎市教育委員会に厚くお礼申し上げます。

参考文献(五十音順)

『岩出山町史通史編・上巻』岩出山町史編纂委員会

平成二十一年

『原色茶道大辞典』井口海仙、末宗広、永島福太郎

(監修) 淡交社 昭和五十年

『茶道辞典』桑田忠親 東京堂 昭和四十三年

『清水動閑註解石州流三百箇條』(三巻)二世清水動閑

十一世大泉道鑑蔵

『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』

十世大泉淑子（道鑑）丸善出版センター

昭和五十五年

『関』（第二十号）全日本石州流茶道協会 平成二十二年

『第十二回文化財庭園フォーラムシンポジウム資料 石州

流清水派の作庭と伝わる庭園に関する調査研究報告』

白崎恵介（宮城県多賀城跡調査研究所）平成二十七年

『動閑茶湯書』（十八冊）二世清水動閑

十一世大泉道鑑蔵

『名勝地保護関係資料集』平澤毅（独立行政法人国立文化

財機構奈良文化財研究所）平成二十七年

『宮城県の名勝に関する特定の調査研究事業報告書』

文化庁・宮城県教育委員会 平成二十八年

付 記

今年、仙台藩祖政宗公生誕四五〇年及び当流の流祖三世道竿没後二八〇年の節目の年に当る。そこで、筆者はこれを記念して本原稿を『関』に投稿した。

十世道鑑は、当流の重要な文献である三世道竿著『道竿拾躰』の解読研究を生前進めていた。筆者は、この解読研

究を補足・完成させて「茶の湯文化学会」の学術誌『茶の湯文化』に昨年の夏投稿していた。幸なことに、今年三月下旬同学会から採択の通知があった。そこで、近い将来この投稿原稿を『関』にも紹介したいと考えている。